会　議　記　録

高松市附属機関等の設置、運営に関する要綱の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会議名	第２回たかまつ創生総合戦略懇談会
開催日時	平成 27 年 7 月 28 日（火）18 時 30 分～20 時 30 分
開催場所	高松市役所　13 階　大会議室
議　　題	（１）たかまつ創生総合戦略（仮称）の検討について （２）その他
公開の区分	■　公開　　□　一部公開　　□　非公開
上記理由	
出席委員 （24 名）	上田委員、上原委員、国見委員、粂井委員、桑村委員 坂口委員、佐野委員、白薊委員、鈴木委員、髙嶋委員、滝川委員、竹内委員、佃委員、徳倉委員、中橋委員、野田委員、花澤委員、原委員、藤本委員、古川委員、槙田委員、眞鍋委員、柳委員、頼富委員
傍聴者	2 人　　（定員　10 人）
担当課及び連絡先	政策課　839-2135

会議の経過及び結果

（1）　たかまつ創生総合戦略（仮称）の検討について

事務局から、資料について説明した後、グループに分かれて、ディスカッションを行い、「施策の基本的方向」について、２つの戦略（①人口減少を抑制する戦略、②人口減少社会に対応する戦略）及び５つの基本目標（①創造性豊かで人間中心のまちを創る、②若者から選ばれるまちを創る、③子どもを生み育てやすいまちを創る、④健やかで心豊かに暮らせるまちを創る、⑤持続可能なまちを創る）の枠組みに合っているか、また、「「高松らしさ」と具体的な施策」について、グループごとに発表してもらう。

A グループ
（委員）
人材流出に関して、優秀な子どもが転出し戻って来ないことが問題である。そこで、幼い頃から職業意識を芽生えさせる機会を設ける必要がある。また、将来の就職先としてあまり知られていない優良な企業（例：日本一の低温乾燥の技術を持った食品加工業者など）が高松市にはたくさんあるため、そのような企業を見つけて、子どもと結びつけ、「興味を持って体験し、地域に対する誇りを持つ」という体験を提案する。
また、将来、何をするかという職業意識も同時に刺激する。さらに、地元ならではの文化に触れることで創造性を高めるという教育も必要であると思う。具体的には、文化（例：漆器、手毬、盆栽など）、自然（例：瀬戸内海など）、食（例：素材、料理など）を通して感動や経験が理屈を超えて、人をふるさとにつなげるのではないかと考えている。
次に、「基本目標④健やかで心豊かに暮らせるまちづくり」や「基本目標⑤コンパクトで持続可能なまちづくり」につながる話であるが、“

会議の経過及び結果
若者を田舎へ”という取組であり、田舎に楽しみを設けることを考えた。もちろんコンパクトシティであるため想像している以上の近さで田舎に行けるため、空き家を若者に安く貸したり、田舎の高齢者と若者が一緒に暮らしたりするなど、高松市ならではの田舎の作り方をする。 さらに、健康は「食」と「運動」であり、食育は欠かせないと思う。 B グループ （委員） 高松市は、人口は減少しないと思っており、非常に有利な市であると考えている。四国の中心は最終的には高松市が担うということを前提として議論を進めた。 高松市は、四国で唯一中国・台湾・上海便があるため活用できると考えている。また、雇用の場の提供も重要であり、大学で高松市に戻ってきたら奨学金制度（例：授業料免除など）を検討し、高松市に帰って来て働きたいと思ってもらうことと、雇用の場を増やすことに取り組む必要がある。 さらに、高松市役所の男性職員で育児休業を取得した職員が「イクメン宣言」をしたり、夜間不妊治療センターを作り、男性も行きやすい環境づくりをして欲しい。自治会の充実、公共交通機関の充実（特にバス路線の本数・時間帯の拡充など）をして住みやすいまちづくりをして欲しい。 C グループ （委員） このような議論は、あれもこれもという議論になり、これまでの取組と同様、結果的に総花的なばらまきになり、成果や効果が出ないという可能性がある。そこで、提示された 5 つの基本目標に優先順位を検討したところ、最重点で取り組む施策は「③子どもを生み育てやすいまちを創る」であるという話になった。 そして、「③子どもを生み育てやすいまちを創る」の具体的な施策を検討した結果、親と子が近くに住む（近居）ことに対する支援（例：親と子が一緒に住むためのリフォーム支援（福井で先進事例あり）など）が必要であるという話になった。また、今後、子どもを生み育てていく若い世代の意見を聞く場がないため、本音を聞く場所も必要である。 また、大都市圏と比較して、高松市に住むことの優位点が多いため、その優位性をプレゼンテーションする仕組みが必要である。さらに、統計的に同窓会の場が結婚に結びつく確率が高いため、それを支援する制度が必要ではないかという意見も出た。 最後に、目玉施策は、教育の無償化であるが、短期的に取り組み、成果を出せる取り組みではないが、大胆な施策（例：高松市は大学卒業するまで全て無料など）を打ち出さないと、人口減少を乗り切ることは難しいのではないかと考えた。これまでのような総花的ではなく、戦略的に集中投資して具体的に進めていくことが必要であると考えた。 D グループ （委員） 「基本目標⇒施策の基本的方向⇒「高松らしさ」と具体的な施策」という順番ではなく、高松市や高松市長が“高松らしさ”を言い切り、5 年あるいは 10 年かけて取り組み、それが市民にとっての“高松らしさ”になるという施策を打つほうがよいという話になった。 そこで、“高松らしさ”を「教育」「アート」「スポーツ」の 3 つとし、そこに力を注いでいく方向で検討した。

会議の経過及び結果
具体的には、「教育」について、四国に美術系や建築系の大学がないため、社会人も入学できる大学院大学のような形の大学を高松市に作る。また、小学校・中学校・高校を全て無償化する。 「アート」については、既に瀬戸内国際芸術祭があるが、“高松らしさ”として打ち出されたものではなく、取り組み続けてきたことで“高松らしさ”になってきていると思う。また、日本アカデミー賞の表彰式を、女木島での開催を誘致し、カンヌ映画祭のように女木島に赤いカーペットを敷いて実施する。 「スポーツ」については、サンポートにスタジアムや体育館などのスポーツ施設を建設するなど、フェリーと JR とことでんが 1 つの場所に集まっているところは日本でも数少ないため、そこにスポーツ施設を作る。また、日本は野球のみ、サッカーのみのように縦割りでスポーツをしている傾向があるため、高松市に行けば地域でスポーツが何でもできるというまちをつくる。さらに、高松まつりの花火大会は 4 年に 1 回として、予算を集中させて規模の大きい大会とするなど、“これ“というものに絞って、それに資源を集中する。 E グループ （委員） 人口減少を抑制する戦略と人口減少社会に対する戦略の 2 つの軸で考えた際に、「楽しい」と「楽（らく）」をキーワードに考えてはどうかと考えた。なぜなら、若者は「楽しく」ないと集まらない、高齢者は「楽（らく）」でないとついていけないためである。ただし、それを踏まえて、「楽しい」と「楽（らく）」を具体的な施策に落とし込む際に“高松らしさ”を見つけるのは非常に難しいと思う。 高松市は、人口や財源などが都道府県や基礎自治体と比較すると、恵まれていて余裕があり、危機感を持っていない。そこで、施策として強く引っ張っていけるようなものがないと、施策としての魅力が出てこないと思う。例えば、高松市内には 16 の高校があり、専門が多岐に渡っており魅力的であるが、それを引き継ぐ大学がないため、専門の分野に興味をもった人はほとんどが市外に転出してしまう。さらに、転出した人が戻ってくる受け皿もない。 既存の資源（例：サンポート、大学など）を活用し、点在している魅力を線にして面にしていくことを高松市内だけではなく、四国まで範囲を広げて展開するキーを高松市が担っていけると思う。 （２）その他 （事務局） 次回の懇談会は 9 月 7 日（月）18 時半からを予定しているため、それまでの間に、本日の頂いた意見を事務局で整理し、8 月上旬頃に委員全員に共有し、追加意見などを頂くことを予定している。また、次回の懇談会は、「たかまつ人口ビジョン」と「たかまつ創生総合戦略」の素案を提示する予定である。 （閉会）